

イワウベツ川流域の中小型哺乳類, 爬虫類, 両生類

村上隆広

099-4113 北海道斜里郡斜里町本町 49-2, 斜里町立知床博物館

Mammals, Reptiles, and Amphibians along Iwaubetsu River

MURAKAMI Takahiro

Shiretoko Museum, 49-2 Hon-machi, Shari, Hokkaido 099-4113, Japan ✉murataka@cf7.so-net.ne.jp

Iwaubetsu River goes through 100 square meters trust area, and its riparian forest is important area for our reforestation project. We inventoried small- and middle-size mammals, reptiles, and amphibians along Iwaubetsu River.

はじめに

100平方メートル運動の森・トラストでは森林生態系の再生をめざしており、哺乳類、爬虫類、両生類もできるだけ元の状態に回復させることが目標となる。知床の哺乳類については1970年代終わりから80年代にかけて総合的な調査が行われた(北海道生活環境部自然保護課1981; 大泰司・中川1988)。その後はいくつかの種について調査が行われていたものの、総合的に哺乳類の生息状況が調査されたことはなかった。本研究では、100平方メートル運動地の間を流れるイワウベツ川の河畔林を中心に、中小型哺乳類の生息状況を調査した。大型哺乳類であるヒグマ *Ursus arctos* やニホンジカ(エゾシカ) *Cervus nippon* については、人身事故防止や経済被害対策のため多くの調査が行われており(岡田・山中2001; 石名坂2016; 山中ら2016)、今回の調査対象から除外した。また爬虫類と両生類については、知床半島のいくつかの場所で断片的な調査が行われただけであり情報が不足している。本調査では、爬虫類と両生類についてもできる限り情報を得ることを目的とした。

調査方法

イワウベツ川流域の6地点(図1)で、2012年2月から2015年10月まで自動撮影用カメラ(Cuddeback Attack model 1149, USA; HGC SG-

007, 中国; Ltd Acorn Outdoors, USA)を設置し、河川沿いを通る哺乳類を撮影した。積雪状況、撮影場所の地形に応じて設置高を0.5-1.5 mの間で変化させた。爬虫類と両生類については、哺乳類調査で現地調査を実施した際に、情報の得られたものを記録したほか、過去の文献や標本記録を調査した。

調査結果と考察

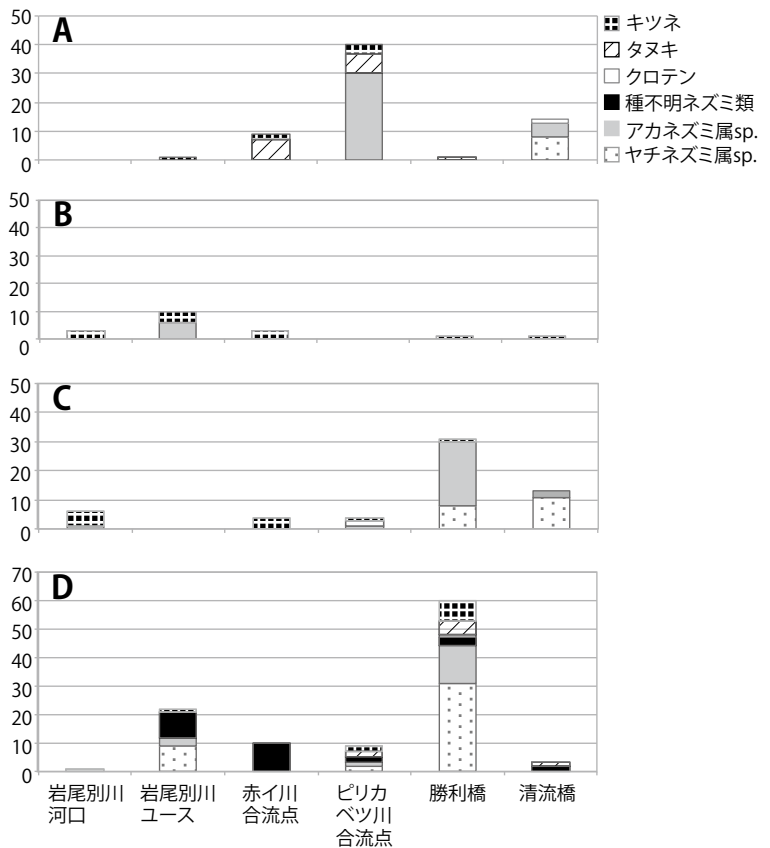
1. 哺乳類

上記期間中に撮影された主な中小型哺乳類の撮影回数は図2のとおりであった。このほか、頻度は低いもののエゾリス *Sciurus vulgaris orientis*, エゾモモンガ *Pteromys volans orii*, イイズナ *Mustela nivalis* が撮影された。まず、全体を通じてノネズミ類が最も頻繁に撮影された。しかし2013年には撮影回数が低く、2015年には高頻度に撮影されるなど変動が大きかった。ノネズミ類の個体数は季節変化や個体群内部の要因で周期的または密度依存的に変動することがわかっている(齊藤2002)。2014年、2015年の調査中には、野外で頻繁にヤチネズミ類の姿を見かけるなど、密度が増加していることが伺えた。ノネズミ類はキツネやイタチ類、フクロウ類などにとって重要なエサ資源である。一方で増えすぎると苗木にダメージを与えることもあり、個体数の変化には今後も注意を要する必要がある。

図1. イワウベツ川周辺の自動撮影装置設置地点. Google earth 画像使用の一般的ガイドライン (Google. 使用許諾, Google, <https://www.google.com/permissions/geoguidelines.html>, 2017年1月11日閲覧) に従って画像を使用した.



図2. イワウベツ川各地点での主な中小型哺乳類の撮影回数. **A:** 2012年2月-2013年5月, **B:** 2013年5月-2014年5月, **C:** 2014年5月-2015年5月, **D:** 2015年5-10月. 同じ箇所のカメラで12時間以内の間隔で同種が撮影された場合は1回とみなした.



がある.

次にイヌ科の2種であるキツネ *Vulpes vulpes schrencki* とタヌキ *Nyctereutes procyonoides albus* について述べる. キツネは調査地周辺で頻繁に見かけ, 河川沿いを高頻度で利用していると考えられる. 一方, タヌキを目撃することは少ないが, 自動撮

影ではキツネに匹敵するほどの頻度で撮影された (図3). 北海道が実施した知床半島自然生態系総合調査では, 知床半島のタヌキは生息密度がごく少なく密度も低いと報告されている (米田1981). しかし, 1990年代から知床博物館に収容される交通事故死したタヌキの件数は増加している. 原因

は不明だが、知床半島での密度が増加しているものと思われる。

イタチ類ではエゾクロテン *Martes zibellina brachyura*、イイズナが撮影された。エゾクロテンは森林への依存度の高い種である(村上2008)。明治期に毛皮目的で乱獲されて激減したが、近年は回復傾向にあると思われる。一方で、シマフクロウ *Ketupa blakistoni*の営巣木に登り、巣内の雛を捕食する事例がシマフクロウ研究者から報告されている(竹中ら2010)。本来はシマフクロウもエゾクロテンも十分な数が生息して生態系のバランスがとれていたと考えられる。今後は両種ともに安定して生息できるように森林生態系を回復させてゆく必要がある。同じイタチ類で、特定外来生物のアメリカミンク *Neovison vison*が赤イ川合流点のカメラで2015年6月5日に撮影された(図4)。知床では標津町で1920年代からアメリカミンクの飼育が行われ、その後羅臼町や斜里町美咲地区にも1960年代から1970年代に飼育場が作られた(米田1981)。また知床半島に隣接する市町村にも同じ頃にミンク飼育が行われ、これらの施設から脱走した個体が定着していったと思われる(北海道1985)。現在ではアメリカミンクが知床半島全域に分布していることが確認されている(村上ら2011)。アメリカミンクは魚のほか両生類、鳥類、小型哺乳類と多様な食物を食べる。生態系への影響が懸念されるが十分な調査が行われていない。知床半島のアメリカミンクが何を食べているのかを調べるとともに、少しずつでも捕獲を進めてゆくことが望ましい。ほかに外来種としては本州から移入されて道内に広がっているニホンイタチ *Mustela itatsi*がいる。しかし、今回の調査では撮影されなかった。収容される事故死個体も少なく、知床半島での生息密度はアメリカミンクに比べて低いと思われる。

このほか今回調査対象としていなかったが、大型哺乳類のヒグマ、エゾシカは岩尾別河口-ピリカバツを中心に多数撮影された。特にサケやマスの遡上する時期にヒグマが河口や岩尾別ユースホテル付近のカメラで頻繁に撮影された。サケやマスを狙って複数の個体がこの地域に集まってき



図3. 撮影されたエゾタヌキ(2012年11月3日撮影, ピリカバツ合流点)。



図4. 撮影されたアメリカミンク(2015年6月5日撮影, 赤イ川合流点)。

ているものと思われる。

以上から、イウバツ川周辺には中小型哺乳類各種が一年を通じて生息していることがわかった。中には外来種であるアメリカミンクもあり、今後の生態系復元のためには、アメリカミンクの影響を抑えつつ他の中小型哺乳類が安定して生息できるようにする必要があるといえる。

2. 爬虫類

今回の調査中にイウバツ川流域で爬虫類は発見されなかった。過去の記録としては、太田・中川(1985)が知床産爬虫類として、カナヘビ科のニホンカナヘビ *Takydromus tachydromoides*、トカゲ科のニホントカゲ *Plestiodon japonicus*、ナミヘビ科のアオダイショウ *Elphae climacophora*、シマヘビ *E.*

表1. 知床博物館に収蔵されている調査地周辺で採集されたアオダイショウの標本.

採集地点	採集日	採集者
斜里町遠音別村岩宇別 北緯44度06分33秒5, 東経145度05分22秒1	1989年10月14日	日垣朝雄
斜里町遠音別村岩宇別 北緯44度06分37秒2, 東経145度05分25秒4	2000年9月24日	法量武

表2. エゾアカガエルの観察地点.

観察地点	観察日	卵塊個数
斜里町遠音別村岩宇別 北緯44度06分15秒3, 東経145度04分26秒4	2012年5月10日	1
斜里町遠音別村岩宇別 北緯44度06分07秒7, 東経145度03分08秒4	2012年5月10日	10

quadrivirgata, ジムグリ *Euprepiophis conspicillata*, クサリヘビ科のニホンマムシ *Gloydus blombhoffii* を記載している。また、現在知床博物館に保管されている標本の中に、アオダイショウの幼蛇が2体ある(表1)。爬虫類については依然として情報が不足しており、さらに調査が必要である。

3. 両生類

エゾアカガエル *Rana pirica* の卵塊を表2のとおり発見した。本種は知床国立公園内の林内で頻繁に成体を目撃するため、広く生息していると考えられる。このほか、佐藤ら(2003)によると、知床五湖周辺と羅臼湖周辺でニホンアマガエル *Hyla japonica* が確認されている。エゾサンショウウオ *Hynobius retardatus* は、佐藤ら(2003)が知床半島基部で確認している。また、私は知床五湖近傍の沼(北緯44度07分54秒2, 東経145度04分56秒7)で1990年7月にエゾサンショウウオ幼生を確認している。このように両生類についても情報は断片的であり、さらに調査が必要である。

引用文献

石名坂豪. 2016. 知床地域のエゾシカの保全と管理. 知床博物館研究報告特別号1: 25-34.
大泰司紀之・中川元. 1988. 知床の動物. 396 pp. 北海道大学図書刊行会, 札幌.
太田英利・中川元. 1985. 北海道東部の爬虫類: 知床博物館のコレクションから. 知床博物館研究報告7: 1-6.

岡田秀明・山中正実. 2001. ヒグマ. 斜里町立知床博物館(編), 知床の哺乳類2. しれとこライブラリー3. pp. 10-73. 北海道新聞社, 札幌.
齊藤隆. 2002. 森のねずみの生態学: 個体数変動の謎を探る. 256 pp. 京都大学学術出版会, 京都.
佐藤孝則・宇仁義和・増田泰. 2003. 斜里地方に生息する両生爬虫類相調査報告. 知床博物館研究報告24: 43-52.
竹中健・高田令子・大野信明. 2010. シマフクロウ雛のエゾクロテンによる捕食とその対策. 知床博物館研究報告31: 25-33.
北海道. 1985. 野生化ミンク実態調査報告書. 76 pp. 北海道生活環境部自然保護課, 札幌.
北海道生活環境部自然保護課(編). 1981. 知床半島自然生態系総合調査報告書(動物篇). 200 pp. 北海道生活環境部自然保護課, 札幌.
村上隆広. 2008. しれとこ100平方メートル運動地周辺におけるエゾクロテンの生息環境利用. 知床博物館研究報告29: 31-39.
村上隆広・池田透・島田健一郎. 2011. 知床半島および周辺地域における特定外来生物アメリカミンクの分布. 知床博物館研究報告33: 61-67.
山中正実・増田泰・石名坂豪. 2016. 知床国立公園におけるヒグマの保護管理の近年の進展と課題. 知床博物館研究報告特別号1: 55-78.
米田政明. 1981. 知床半島の陸棲中・小型食肉類. 北海道生活環境部自然保護課(編), 知床半島自然生態系総合調査報告書(動物篇). pp. 114-125. 北海道生活環境部自然保護課, 札幌.